外出行動からみた子育ての実態

－生後 2 年にわたる縦断的検討－

小島康生 [1]
（[1] 中京大学）

目 的

本研究は、初期の子育てを、「家」という場を超えて広がる生活世界の広がりや特殊化として生態学的視点からとらえなおそうとするものである。初めての子どもを産んだ母親が里帰りを経て自宅に戻ったのち、どの時期にどのような場所へ子どもを連れて出かけるのか、個人差がなにに基づいたものなのか、またそれが子どもの発達にどう影響するのかを 2 年にわたる追跡データから検討した。

方 法

第一子をまもなく出産する（もしくは出産して数日以内の）女性（母親）8 人に対し、本研究への協力を依頼した。所定の記録用紙を渡し、毎日、子どもとの外出の有無と外出した場合の外出先・同伴者などを記録してもらった。1 ヶ月毎に協力者宅を訪問し、1 時間程度のインタビューを行った。子どもが 2 歳になるまで、このことを繰り返した。本発表では、職場に復帰した 3 名を除く 5 名について、子ども連れでの外出行動の分析結果をおもに報告する。

結 果

5 名（略称 Y、G、S、K、C）はいずれも里帰りを経験し、G を除く 4 人は出産から 50 日以内に自宅に戻った。G の里帰り期間は 5 ヵ月半であった。

外出先を以下のように分類した。①母親の実家（里帰り中を除く）、②夫の実家、③親戚の家、④病院・保健所（子どもの受診）、⑤病院（親の受診や見舞い）、⑥スーパーなど買い物をするところ、⑦金融機関・官公庁、⑧外食店、⑨散歩、⑩公園、⑪ママ友の家、⑫（子どものいない）友達の家、⑬育児サークル、⑭テーマパーク等、⑮図書館、⑯美術館等、⑰大人の娯楽ないし（主に）大人が集まるところ（ボーリング、結婚式等）、の 15 種類であった。

里帰りを終えて以後、実家へ行く頻度は、車を運転する Y や S、実家が近い C では比較的高く、運転をしない K の訪問頻度は低かった（図 1）。K については、実家の父ないし母が自宅を訪れることのほうが多かった。⑤、⑥、⑦、⑯をまとめて「親の用事による外出」とし、その変化を図に示した（図 2）。外出の頻度は全体に次第に増えていることがわかった。

以上に述べた以外の外出先については、5 名に共通する傾向は見いだせなかった。

考 察

全体に、外出の頻度が増えていく点は 5 名に共通していた。だが、それぞれの場所に初めて出かける時期、あるいはその後の外出頻度の変化については概して一定の傾向が見いだせなかった。そうした個人差には、車の運転が可能か、実家が近いか、住まいがどのような地域にあるか、などが影響しているようであった。母親はそれぞれに、自分の置かれた状況に合わせて、日常の活動（買い物、外食など）を行ったり、子どもに刺激を与えたりしており（散歩、育児サークル、テーマパーク、図書館等）、そのようにして子どものいる生活になじんでいくことが示唆された。

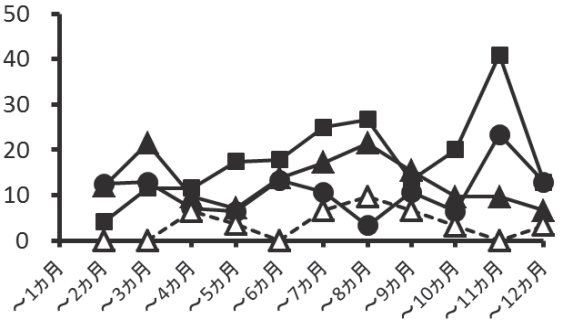

図 1. 母親の実家への訪問頻度（1 ヵ月に占める割合）

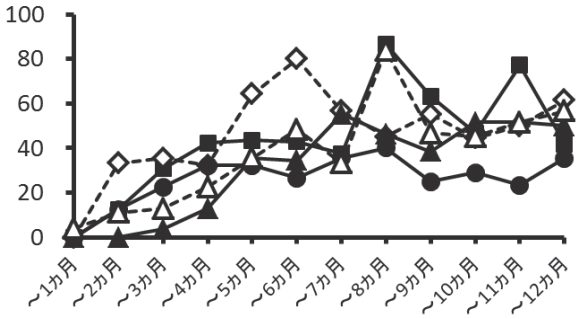

図 2.「親の用事による外出」の頻度

※本研究は、平成 21～23 年度科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究、課題番号 21653068）の助成を受けて行ったものである。